

禅の友

Zen no Tomo

6

June 2024





ご本山だより 大本山永平寺【衣替え】

大本山永平寺
福井県吉田郡

☎〇七七六・六三・三一〇二



永平寺というと、雪深い深山幽谷にある禅の修行道場という印象をお持ちの方が多くのではないのでしょうか。氷点下の寒い朝、裸足で白い息を吐きながら廊下掃除をする修行僧の姿を想像する方もいるでしょう。なにも間違いはないのですが、それは冬の話です。

実は永平寺の夏はとても暑く感じます。その原因は湿度が非常に高くなることです。三方を山に囲まれ、目の前には川が流れています。そして境内には湧き水まであるのです。並大抵の湿度ではないのが想像できるでしょう。修行僧が坐禅をし寝食をする僧堂の床は土間の三和土で、夏になると湿気により非常に滑りやすくなります。筆者も修行中、廊下掃除に駆け出そうとした時、足を滑らせ転んだことが何度かあります。

そのような中、衣替えが行われます。夏の着物に変わり涼しくはなりますが、

冬物を着ているよりは幾分か楽であるといった感じですが。暑いことには変わりはありません。

このような時、修行僧たちはどのように過ごすのでしょうか。着物を緩め、肌の露出を多くして涼を取るのでしょうか。暑さと湿気のために修行の手を抜くのでしょうか。そうではありません。いつでも着物の襟元を調え、作法にしたがって日常をすごします。

威儀いぎ即そく仏法ぶつぽう、作法是宗旨という言葉があります。具体的な出典は不明ですが、修行道場などでよく用いられる言葉です。正しい身だしなみと振舞がそのままほとけの教えであり、作法のとおり行うことがもつとも重要なことである、という意味です。

季節は変わろうとも、身だしなみと振舞には細心の注意を払い、作法のとおり生活をつづけるのが永平寺の修行です。



ご本山だより

大本山總持寺【六月の總持寺と伝光会攝心】

大本山總持寺
神奈川県横浜市
☎〇四五・五八一・六〇二二



昨年の伝光会攝心

梅雨入りの季節となりましたが、總

持寺のある鶴見区は南風が吹くとも
もに、梅雨と重なり高温多湿の何とも
不快を感じる気候となります。

地球沸騰時代に入ったと言われて
いますが、大雨、洪水で被害のないこ
とを願ってやみません。

「山あれば山を観る 雨の日は雨
を聴く 春夏秋冬 あしたもよろし
ゆうべもよろし」自由律の俳人・種田
山頭火の作です。

私たちは晴れが続くと、少し雨が降
らないかなと思ひ、また雨が連続と晴
れてくれればよいのになと思ひ、まこ
とに勝手なものです。

晴れが必要な人もいますし、雨が必
要な人もいます。また目の前にあ
る景色でも四季折々の様々な光景を

作り出してくれます。

山を楽しみ、雨音を楽しむ、四季の
花々を愛でて楽しむ、日々好日が現前
に展開されていくのです。

人生の幸せや豊かさは決して遠く
に求めるものではなく、脚下にあるも
ので、どんな境遇であっても心の持ち
方ひとつで人生は変わっていくもの
だとこの詩は教えてくれるのです。

さて總持寺では六月三日から七日
の五日間、伝光会攝心が行われます。

この攝心は、昭和二十一年に独住第
十七世・渡辺玄宗禪師が私財を投じて
始められた行持なのです。

期間中は坐禪に徹するとともに
西堂であられる青山俊董老師の講義
による『從容録』を参究致します。

選・坊城俊樹

江の島の坂と子猫と夕コせんべい

和歌山県 田崎 よし子

評 面白い句。たしかに神奈川県の江の島へ行く
と猫が多い。坂も多い。その風景に滑稽味がある。
夕コせんべいは知らなかったが、それもまた滑稽味。
俳句とはそもそも江戸時代の俳諧のころから滑稽を主体とした。すなわちこの句は愉快であつて伝統的。

ふるさとと雲かも知れぬ揚雲雀

三重県 刈屋 奈良美

評 確かな実感のある句。雲雀は空の高いところを飛翔し、たまに急降下する。それを「ふるさと」と感じた作者の感性はみごと。雲雀の鳴き声もまた天高きところから落ちてくる。このことで昔から天界と地上を結ぶ使者と呼ばれていたという。

◆ 入賞の亀の絵だいて卒園す 京都府 田中康子

◆ 微笑みの釈迦牟尼仏や春浅し 岡山県 有元克英

◆ 父母眠る彼岸の墓碑に触れもして 島根県 藤江 堯

◆ 洋館のステンドグラス寒鴉 埼玉県 伊藤 博

◆ 春風に眠るものかと屋根の鬼 鳥取県 徳本義則

◆ 天上の妻との会話春の宵 埼玉県 小林茂之

◆ 丁寧な婆と褒められ雛納む 宮城県 金升 富美子

◆ 朝方のうつらうつらや花筏 三重県 西村廣視

◆ のどけさや猫の伸びするあの出窓 神奈川県 堀田耕一

◆ 家中が疲れてをりぬ大試験 山口県 御江恭子

選者吟

臙夜の自分自身とすれ違ふ 俊樹

作句小見 たしかに臙夜というものは臙気で幻想的である。今すれ違つた人はもしかしたら私自身だったのかも。ちよつとそれはホラーであるが、その幻想的な風景はまた魅力的でもある。俳句とは写生的なものだが、こんなロマンティックなものもある。

選・長澤 ちづ

落の葉に包み葬るジヨウビタキ昨日か茅野を揺らしてゐしは

静岡県 杉原 民子

評

ジヨウビタキは腹部がオレンジ色をした可愛い冬鳥で、ヒツ、ヒツと火打石を打つような声で鳴くので、ヒタキ（火焚き）と名付けられたとか。そんな小鳥を作者は落の葉に包み春の土に葬る。命の儚さを愛おしむ繊細さがさりげない。

追伸を幾度も寄こした山茶花の花弁はつひにペンを置きたり

三重県 西村 廣視

評

山茶花と椿は一見似ているが、椿が花ごと落ちるのは違って、花びらとして散る。その様子を便箋に喻え、後れて散る花びらを「追伸」と見立てて詠い洒落た味わいがある。

◆ 探鳥会参加の予らはすぐに倦み枯草の土手まろびて遊ぶ

広島県 徳永進一郎

◆ 梵鐘の音に緞置きて黙禱の老夫婦二時四十六分

静岡県 末光愛正

◆ 雪消えて葉先光れる畑の葱一番追肥を屈みつつやる

岩手県 岩戸 さとる

◆ 一篇の詩を思わせて紺碧の空の高みのひとひらの雲

埼玉県 白藤 巳玲

◆ 目に見えぬレール敷きくれし父母か彼岸の鐘をしみじみと聞く

北海道 加藤智子

◆ しづりゆく雪の衣を脱ぎ捨てて春待ち顔のピラカンサの実

秋田県 高橋カツ子

◆ 吾妻嶺雪形うさぎにうながされ開墾畑に馬鈴薯を植う

福島県 大槻 弘

◆ 自家用車にも注連飾り付け氏神に詣でし頃よ昭和と言へり

島根県 横山 豪吾

◆ 音高く川に落ちこむ雪解け水濁りて春日暖かき千後

鳥取県 徳本 義則

◆ ホトケノザを紫姫と呼ぶ孫はママにおみやげと花束作る

埼玉県 小熊 星子

選者詠

遠い過去が傍らに来て座りおり葉半紙の束の

ような感じに

ちづ

作歌小見

横山さんの自家用車の注連飾りの一首、我が家でも覚えがあります。確かに暮れに門と一緒に飾っていました。新年のけじめがどんどん希薄になってゆきます。拙歌も紙の文化が廃れてゆくことへの悲しみを籠めました。